

初手特殊能力ガチャで大爆死した俺は最後まで生き残れそうですか？

五月雨 青葉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生して強能力を得て無双。それなら

転生して弱能力を得て困惑。これも有り得る訳です。

これは、そんな能力ガチャで爆死した人間の
異世界生活。

階段登ってて1段多く感じる事。貴方はありますか？

目次

1日目	初手特殊能力ガチャ爆死	1
2日目	森でウサギ狩り?! (1)	7

1日目 初手特殊能力ガチャ爆死

早速だがここでメタい話をさせてもらおう。

「特殊能力」これは異世界転生でも何でも戦闘系ストーリーの中で最も大切な要素の1つである。

ある者は爆発。ある者は炎。またある者は雷等その特殊能力は様々であろう。

手で触った相手の能力を無効化する。なんて壊れた性能をしている能力だって君は見た事があるかもしれない。

だが、この初手特殊能力ガチャ勿論爆死する人だって居ていい。いや、絶対に居るはずである。

…という事でこのお話は、もし「初手特殊能力ガチャでゴミみたいな力を手に入れたらどうなるのか」という内容です。

——ドンつと低く重い音が辺りに響き渡った。

強い衝撃を正面に受け、俺の体は宙を舞った。

地面に強く叩き付けられた俺は自分の体から血液が漏れていくのが感じ取れた。

「俺、死んだなコレは…」

余りの痛さに声が出ない。口に出したつもりだったが周りに集まって来た人には聞こえて無いようだ。

必死に俺の体を揺さぶっている。

「父さん。母さん。恩返し出来なくてごめんな…」

その一言を最後に俺は意識を失ってしまった

「……………ん、あれ？」

さつきまで俺は道の真ん中で倒れていた筈なのに周りの景色が一転しているのに俺は気付いた。

まだ多少体が痛むがある程度は自由に手足を動かす事が出来た。

周りは真っ暗。地面も壁も見えない。それでも自分の姿だけはしつかりと見る事が出来ている。

「天国…では無さそうだよな」

最初は病院かと思ったがこれは俗に言う「あの世」と言われる世界だろう。と、というか暗闇の中に何故か看板が浮かんでそこには『あの世』と書かれている。わかり易っ！

「いやー、俺この後どうなるのかな…」

今後がかなり不安だがとりあえず暗闇の中を手探りで進んで行く。

暫く進んでいると、俺は以外にも後ろから声を掛けられた。

驚きながら後ろを振り返ると、そこには80程に見える老人が1人立っていた。

「ようこそ。ここは中継点と呼ばれる場所だよ」

老人は笑みを浮かべながらこの場所について教えてくれた。

「中継点…？」

よく分からない言葉に困惑し小首を傾げていると、

その老人は俺に向かって上に穴の開いた小さな箱を差し出してきた。

「ほれ、中には紙が入っておる。好きなのを3枚引きなさい」

未だに疑問だらけな状況だが、ただ3枚紙を引く事を行為を拒む理由は特に見当たらない。なので適当に箱に右手を突っ込み箱の1番下にまで手を伸ばし、箱の底にあった紙を3枚手に取り箱から手を取り出す。

「えっと、引きました。」

とりあえずよく分からない老人に自分が紙を引いた事を伝える。そうすると、老人は「開いてみ」と言いながら小さな箱を自分の足元に置き、俺の引いた紙を覗き込む

「まず1枚目、『左手の人差し指から自由にトコロテンを出す事が出来る』」

紙に書いてあった内容を読み上げる。

「文字通りゴミじゃな。」

老人はそう言いながら首を傾げる。

「2枚目、『半径500m以内の人間が階段の段数を1段多く感じるようになる。』」

「まあ一応ビックリはしそうじゃな。それと無駄に範囲が広いのが気になるのう。」

老人はそう言いながら鼻をほじり始める。

「3枚目、『サクラランボの茎を舌で結べる』」

「最後に至っては宴会芸じゃな。友達内でやると盛り上がるかもしれない。」

老人は鼻から指を抜き、フツと息を吐く。

「…で、これは何なんですか？」

素直に気になったので聞いてみる事にした。

すると、老人は申し訳なさそうな顔をしながらローテンションで教えてくれた。

「君は今から、俗に言う異世界に転生して貰う。だから、それはその異世界で君が使える特殊能力の候補だよ。」

俺は自分の耳を疑った。

「…は？」

自分の引いた3枚の紙を再び眺める。

「この中継点は異世界に転生する事を許された人間のみが死後に来れる所。そしてここで能力を1つ決めて、異世界で頑張ってもらおう。そんな感じじゃ」

異世界、転生、色々ど気になるフレーズがあつたのは確かだ。だが今の俺にはもっと気になる言葉が1つあつた。それは

——『そしてここで能力を1つ決めて』

「…え、って事は」

俺は自分の引いた三枚の紙を顔の正面まで持ち上げる。

「選べ。」

老人がニツコリといい笑顔で選択を迫ってきた。

「いや、選べるかア！」

俺は3枚の紙を地面に投げ捨てる。

「ぷぷつ、面白い程爆死したもんじゃな。可哀想」

と、笑いを堪えながら誰もが思った爆死という1つの事実を俺に叩き付けてきた。

「これ笑い事じゃないよね？なに、『異世界で頑張ってもらおう？』？コレじゃ俺宴会でしか活躍出来ないよ？」

「でも、ワシはサクランボの茎を舌で結べんぞ。羨まし。良かったじゃん」

完全に他人事の老人は諦めたような目で俺に能力を勧めてくる

「いや、サクランボ舌で結べたって攻撃力0だわ！村の子供にデストロイされるわ！」

「んー、じゃ、サクランボの茎を舌で結べる能力はダメじゃな」

「当たり前だよ！」

そういうと、老人はそれに該当する紙を手に取り破り捨ててしまった。

「まあ、ゆっくりと残りの2枚の中から自分の特殊能力を選ぶんじゃな。」

老人はそう告げると闇に消えてしまった。

残りの2枚。指からトコロテン出すか、階段に違和感を覚えさせるかの2択。

悩んだ俺は、『左手の人差し指からトコロテンを自由に出せる能力』に決めた。

トコロテンなら階段の方がいいかもしれないが良く考えて欲しい。階段が1段多く感じる。これが活かされる場面があるわけが無い。

それに比べてコロテンが出せば食費が浮くのである。もうそれしか利点が無い。

「3枚目の能力に決めました。」
そう宣言すると、再び俺の意識は闇に消えていったのだ。

「……………！……………！」

誰かに体を揺さぶられているのを感じ、目を覚ました。
意識がハッキリした時、呼ばれているのが自分の名前だと分かった。

「幸也！良かった。目を覚ましたのね!？」

頭以外を甲冑で覆った女の人が涙を流しながら俺の体を揺さぶっていた。

「私の事分かる?」

その女の人は自分を指さしながら名前の確認をしてきた。

「…ごめん。分からない」

「ここは正直に答えた方が良さそうだ。」

「…そう。」

彼女はどこか寂しげだった。

「私は未来。『みらい』って書いて『みく』って読むの。」

「ご丁寧に漢字の説明をしてくれた。どうやら世界観は日本と同じらしい。」

「未来…か。おぼえてないんだが俺の名前は?」

今は前の世界の名前すら思い出せない。一応前世の記憶は消されて居るんだろうか。

「宮内 幸也。貴方の名前は『ゆきや』!」

幸也。それが俺の名前らしい。

名前が分かったところで次に気になったのはこの状況だ。俺は何があつて倒れてたんだろうか

「とりあえず俺に何があつたのかわかるかな？」

聞くと、彼女は困惑しながら答えた。

「ス、スライム1匹にボコボコにされて気を失つてたの」

…まあ、想定通りである。あんな能力なら多少は負けるわな。スライムに。

「…1週間前に寝込んだきりだつたのよ？」

更に困った顔で彼女は言った

「まさかスライムにフルボッコにされた挙句1週間も死線をさまよつたとは…」

怖っ！この能力の弱さ怖っ！！

「ゆっくり休んでね…」

未来はそういうと俺の傍を離れ部屋をゆっくりと出ていった。

『絶対戦闘はしない』

そう心から誓った幸也だった。

2日目 森でウサギ狩り?! (1)

「幸也ー!!なんで寝てるの?!今まだ午後3時前だよ!」

未来に叩き起される。左手で目を擦りながら布団から体を起こす。元々の様子を知らなかったのどどのくらい寝たかは分からないが、未来の発言からすると結構時間が経ったのだろうか。それにしても眠い。

「うむ。起きたね?おはよう」

俺が体を起こしたのを確認するとわざとらしく頷き、未来は俺に挨拶をしてきた

「ふわああ。おはよう」

欠伸をしながら未来に挨拶を返す。

俺はなにがあつて前世で死んだのか。そもそもなぜ俺が転生してるのか。この世界は何なのかと疑問は尽きないがそれはきつとここでの生活が答えをくれるんじゃないか。そう思い、特に未来に対し何か特別な事を質問するのは辞めておいた。

「起きていきなりで悪いんだけどさ、外でウサギを狩って来てくれないう?」

そういうと未来が麻で作られた袋を俺に渡してきた。

「トコロテン塗れになりそうだけど良い?」

兎か。どうやら前の俺はスライムにフルボッコにされてたらしいが兎なら勝てるだろう。…きつと

「洗うから関係ない!3匹くらい狩ってくれたら嬉しいかも。」

俺の事を気にしてか最低1匹でも良いよと言ってくれた。気遣いは本当に嬉しいが、俺も戦いになれる必要があるしそうなので3匹狩る事を心に決めた。

「じゃ、行ってくるわ。」

ベルトに着いていたホルダーの中に未来が手渡ししてくれたナイフを収める。

「ん、気をつけてね?6時までには帰ってきてね」

——いや門限あるのかよ。つかお前親なの?

心の中でそんな疑問を抱きながらドアノブに手を掛ける。

何気にこの世界で外を見るのは初めてで少し緊張しながらドアノブを捻り扉を開ける。

眩しい日が指し、知らない鳥が空を飛んでいる。小さな村だったところで周りは畑が広がっていた。桑やスコップも目に入った事から少し安心してしまおう自分がいた。

田舎なのだが凄くオシャレで建物は赤、黄、青等様々な色のレンガで作られていて村全体の雰囲気が生き生きとしているのがわかる。

「おっと、そうか。兎を探さなきゃ」

あまりにも綺麗な景色で見とれてしまった。

周囲を見渡し、兎が居そうな所を探す。

「兎兎と…」と呟きながら村を歩いていると、年齢は10前後に見える少年に話し掛けられた。

「おじさんもウサギ探してるの?」

いきなり殴られるんじゃないかと思いきや構えだが、どうやら少年も目的は同じようで手に槍を持っていた。

「うん。そうなんだよ。兎の居場所知ってるかな?」

これは丁度いいと考え、兎の居場所を教えてもらおう事にした。「しってるよ!こっち来て」と笑顔で走り出す少年を見て、少し俺は童心に帰った気分になれた。

村を出てどれくらい歩いただろうか。最初は草原だったのだが大きな坂を幾つか登り、気が付いたら深い森に居た。

「…こんなところに兎なんて居るの?」

俺はてつきり草原みたいな所で探すのかと思っていたので森は意外だった。

「え?普通は森にいるんだよ」と笑いながら聞き流されてしまった。言われてみれば森だった気がする。

暫く森の中を探し回ると、後ろに居た少年が

「おじさん、いっぱい居たよ！」

と大きな声で教えてくれた。

やつとかと思いい腰にあったナイフに手を伸ばしながら後方を確認する。

するとそこに居たのは俺の予想の遥真逆。

その姿はまさしくドラゴンそのもの。

「おいーこれ兎じゃねーだろ！」

慌てて少年を抱えて逃げようとした。

流石にまずい。トコロテンじゃ勝てない！

だが少年は「えっ？」と驚き俺に

「アレ超凶暴邪悪獣型殺人龍だよ？ほら、耳が兎じゃん」

と言ってくる。言われてみればほんとに耳が兎だなあ。

——つてなる訳ねえだろ！俺の知ってる兎じゃなかった！まさかの超凶暴邪悪獣型殺人龍 だつ た！つ て い う か

動揺しまくってる俺とは裏腹に、行くよっ！と意気込んでから少年は持っていた槍を構える。すると、不思議な事にその槍の先端に森の植物が勝手に巻き付いていく。

「それお前の能力なのか？」

特殊能力を完全に理解した訳では無いが、この場合こう考えるが自然だろう。

「そうだよ、これが僕の能力！植物装！」グラスフォーム

なんだよそれ。カツコよすぎか？俺なんてその感じで言ったらトコロテンフォーム心 太 装 だ ぞ ？ 嫌 過 ぎ る わ ！

「おじさん、僕の名前は『お前』じゃなくてリーフって言っただよ」

さりげなく自己紹介。なるほど、植物使いだから葉っぱか。納得。

「良いか？リーフ。俺の名前も『おじさん』じゃない。幸也だ。今日は覚えて帰れよ？」

左手の人差し指と親指を立てながらリーフを指さす。

——さて、どうするか。

「…とりあえずたぶんビームとかは出してこなそうだから頑張った後ろに回ってナイフで…」

そう考えていると超凶暴邪悪獣型殺人龍がリーフに向かって火の息を吐いていた。

リーフは咄嗟に槍を前に突き出し、植物で壁を作る。

火は植物の盾を燃やしていたが、リーフにダメージは無さそうだった。

「…めっちゃビームみたいなの出してきたわ」

帰りたい。すぐ帰りたい。

炎を吐く竜VS植物使用とか凄い絵になるじゃん。

でも俺トコロテンだよ？このままだと

炎を吐く竜VS植物使用（トコロテン添え）

みたいな感じになるじゃん！俺要らない子！

「幸也危ないよー！」

ウサギが俺に向かって前足を振り下ろして来た。

リーフのおかげで反応がギリギリ間に合った！

俺は死ぬ思いで右側に転がり込み攻撃を何とか躲す。

——危ねえ！死ぬ！死ぬう！

だが逃げていても解決はしない。俺は決死の覚悟で

ナイフに力を込めてみる。

すると、ナイフの表面からニルニルとトコロテンが生えてきた

——気持ち悪ウ…

自分の能力に引きながらも俺はナイフを生暖かい目で見守る。

今気づいたのだがどうやら俺はトコロテンの強度も変えられるらしい。ナイフに生えてきたトコロテンはナイフを包み込み、ナイフが刀のようになっている。

「これならなんとか…？」

ウサギと戦っているリーフの元に急いで戻り、

トコロテンソード（仮）を構える。

「うわ、キモっ」

リーフにダイレクトに嫌がられたが仕方ない。

実際気持ち悪いし。

リーフはトコロテン製の刀を眺めると、

「能力名は純白トコロテンブレイブの剣で良くね？」

と命名してくれた。

——漢字だけ見れば凄いカッコイイ！

名前も決まったし、後はウサギを3匹どうにかして倒さなきゃ……！